

説教 『誇るな、いや誇れ』山本 護 牧師
聖書 エレミヤ書 9：22～23／コリントの信徒への手紙一 3：18～23

事あるごとにイエスと対立したファリサイ人は信仰熱心な人たちであった。聖書(旧約)をよく学び、礼拝を重視し、節度を保って生きる人たちであった。それがなぜ、イエスと衝突したのか。「主はこう言われる。知恵ある者は、その知恵を誇るな。力ある者は、その力を誇るな。富ある者は、その富を誇るな(エレミヤ 9:22)」。ファリサイ人は総じて清貧なので富を誇ることはなかった。だが勤勉であるがゆえに「ゆるい生き方」を軽蔑し、努力して得た知恵や能力を誇り、賞賛されることを求めた。預言者の言葉を継ぐイエスは、排斥されて「頑張りようがない者」と共にあり、衝突は不可避であった。

パウロはファリサイ人の典型であったが(ガラ 3:5~6)、「この世の知恵は、神の前では愚かなもの(1コリント 3:19)」と大転換し、その回心体験は凝縮された形で伝えられている(使徒 9:1~22)。こんなパウロが幾度となく手紙を宛てたコリントの共同体はどんな教会だったのか。貧しい使徒たちの教会を援助し(1コリント 16:1~3)、霊的なものを求める熱心さ(14:12)は立派。しかし熱き信仰によって分派をつくった(1:12)。だからパウロは「だれも自分を欺いてはならない(3:18)」、自らをよくよく省み何が真実かを見極めよ、「本当に知恵のある者となるために愚かな者になれ(3:18)」と戒めている。なぜなら、ファリサイ人のようでなくとも、コリントの教会では霊的な知恵を誇るどころがあったからだ(3:18)。

イエスは「貧しい人々は幸いである～今飢えている人々は幸いである～今泣いている人々は幸いである(ルカ 6:20~21)」と語った。イエスのまなざしは、貧者、病者、障害者、被差別階層民に注がれ、彼らは知恵や力を誇りようがなかった。誇りようのない幸い。にっちもさっちもいかず「神に頼るより他ない」という幸い。それは分かるのだが、適度にお金や健康の心配をし、適度に「ゆるい」私たちに何ができるのか。イエスも極端だが、教会の迫害者から教会の宣教者に転換したパウロも極端だ。世にあってほどほどに暮らしているキリスト者は、いったいどうすればいいのだろうか。

「貧しく、飢え、泣く」者はいわば他律的な幸い。何かしら誇りうるものを持っている私たちは、他律的な幸いに浸ることはできまい。かといって、教えをもれなく実行する自律的な幸いも不可能。では、どこに救いがあるのか。「あなたがたはキリストのもの、キリストは神のもの(3:23)」。この一体性に迎え入れられることこそ幸い。そうして「パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの(3:22)」となる。自律でも、他律でもない。「キリスト律」とでも言えようか。「誇る」とは人間の評価を求めること。これを放棄し、手放しの祈りでキリストとの一体性に与る。そして、生と死を、現在と永遠を、すつと自然に捉まえる。

「私たちはキリストのもの、キリストは神のもの(3:23)」。この真実は誇りうる。つまり「誇る者は、この事を誇るがよい。目覚めてわたしを知ること。わたしこそ主(エレミヤ 9:23)」。熱狂の信仰で「自分を欺かず(1コリント 3:18)」、むしろ冷静に「目覚めて主を知る(エレミヤ 3:23)」こと。私ができることでありながらこれを誇りうるのは、キリストに迎え入れられている私のことだから。主なる神のことだから。



【おまけのひとこと】

言葉は対になっている 霊か肉か 天か地か というように 信仰も自力か他力かに整理されるが 現実には相当な膨らみがある 神か人かにキリストの第三項を加えてみると ほら立体の陰影が